伝統工芸

ふくべ細工

夕顔の実を用いる栃木県の名産 かんぴょう面の絵付け

夕方咲く夕顔の実からできるかんぴょうとふくべ

栃木名産として代表的なものの一つに、かんぴょう（干瓢・夕顔の果肉を細長く裂き、乾燥させた食品）があります。このかんぴょうが、ふくべ（瓢・ひょうたんに同じ）細工の材料となるふくべと共に、同じ夕顔の実からできることはあまり知られていません。

よって、栃木県は全国で八割の生産を担うかんぴょうの名産地であると同時に、ふくべ細工の伝統を守り続けてきた地域でもあるのです。

栃木県に、夕顔がもたらされたのは、正徳2年（1712年）のこと。鳥居伊賀守忠英が、近江国水口から下野国壬生に国替えされた折に、夕顔の種をもってきて、農民に試作させたのが始まりといわれています。

夕顔は、ウリ科の蔓性一年草。夏の夕方に白色の花を開かせることから、この名がつけられました。

昔は炭入れとして利用されていたふくべ。今は工芸品として人気

ふくべは、夕顔の収穫期である8月頃に次年用の種を取り除き、外皮（ふくべ）を乾燥させます。ふくべ細工は、その形によって花器や小物入れ、人形魔除面などとして細工が施されたものですが、昔は、炭入れなどに利用されていたようです。

また、ひょうたん（瓢簞）は夕顔の変種で、これもふくべ細工の材料となります。ちなみに慶長見聞集には、ひょうたんが酒器や煙草入れに利用されていたことが記されており、ひょうたんも昔から愛用されていたことが偲ばれます。

ふくべ細工の品々を探すなら日光駅周辺の観光みやげ店「特産品コーナー」などで花器やお面、レターラックなどアイデアあふれる、ふくべ細工の工芸品が数多く揃っています。

▲ひとつひとつ自分の手で作りあげていく喜びは、また格別の思い出になります

製作工程

ふくべ細工でお面を作る場合を例にとって、その工程を簡単に説明しましょう。

①面に使われるふくべは、夕顔の実を縦に2つに割って作られます。お面の平均的な大きさは、縦約25㎝、横約25㎝。

まず、ふくべの生地を生かしたデザインを考えます。

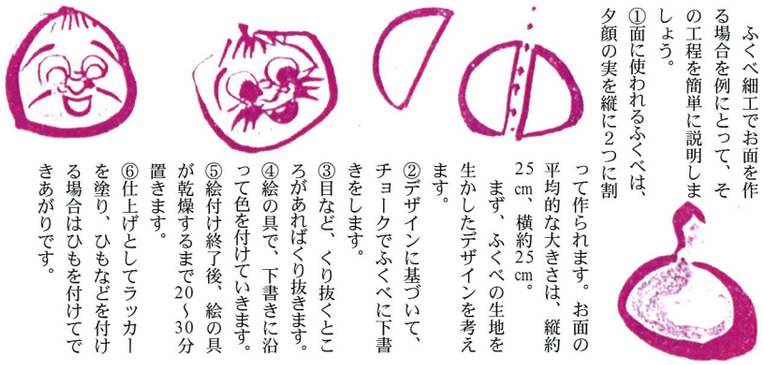
②デザインに基づいて、チョークでふくべに下書きをします。

③目など、くり抜くところがあればくり抜きます。

④絵の具で、下書きに沿って色を付けていきます。

⑤絵付け終了後、絵の具が乾燥するまで20～30分置きます。

⑥仕上げとしてラッカーを塗り、ひもなどを付ける場合はひもを付けてできあがりです。



お面制作に持参するもの

- ●筆（太細各一本）
- ●ハンカチ大のボロ布

郷土玩具 ふくべ洞
小川昌信
〒320-0811 宇都宮市大通り2丁目4番8号
TEL 028-634-7583
FAX 028-634-7586